

福島の子どもたちのためにできることは 「福島の子ども保養プロジェクトシンポジウム」開催



フリップディスカッションなど、参加生協で意見を交換したり、福島にお住まいの方の話を直接聞く機会となった。

9月21日、日本生協連は、福島市で「福島の子ども保養プロジェクト」[※]シンポジウムを開催し、このプロジェクトの意義や効果を確認し、継続するための課題などを話し合いました（参加32団体111人）。

シンポジウムでは、当プロジェクトのアドバイザーである福島大学西崎伸子准教授から、乳幼児とその親を対象に毎週末行なわれているプロジェクトの参加者アンケートの分析結果について報告があり、「参加者同士で自由に発言できる安心感、支援する人・支援される人を固定化しないことの大切さ、乳幼児向けのプログラムの必要性」について話していただきました。

また、日本ユニセフ協会の谷杉佐奈美さんから、「一つの団体で無理してやると、継続できない。行政や大学など、周りの団体とのネットワークを結びながらやっていくことが重

要」との課題が提起されました。

翌日は、オプション企画として、子ども保養プロジェクトの視察を行ないました。参加者からは、「実際に福島県の方がどのように思っているのか、直接聞くことができ参考になった」という声が聞かれました。

[※] 放射線量の比較的低い地域で、子どもや保護者が心身ともにゆっくりするためのプロジェクト。2012年1月より、福島県生協連と福島県ユニセフ協会、福島大学災害復興研究所が中心となって始まった。



週末保養企画の視察には、22人が参加した。

福島の復興は、始まったばかり 茨城県生協連「バスボランティア」



本来なら稲が揺れているはずの田んぼには、1mを超える背丈の雑草が生い茂っていた。

10月27日、茨城県生協連は、計画避難解除準備区域に指定されている福島県南相馬市の小高地区へのバスボランティアを企画し、県内生協役員など26人が参加しました。

小高地区は、東京電力福島第一原発事故後は避難区域に指定されており、

今年4月に避難解除されましたが、ライフラインも整備されていないため、住民はまだ戻ることができません。

ボランティアの参加者は、南相馬ボランティアセンターから紹介された畑の草刈りを行ないました。

参加者からは、「TVとはまったく違う。ボランティアセンター長の『今回作業をお願いした草刈りや石拾いは、被災者の心の草、石を取り除くことにもつながる』との言葉が印象的でした」との感想がありました。茨城県生協連専務理事の古山均さんは、「小高地区は5年後に住民の皆さまが戻るよう取り組んでいるそうです。福島の復興は始まったばかりです。できる

限りの支援をしていきたいと思っています。全国の皆さまには、ぜひ、福島の今の姿を見て、多くのことを感じていただきたいです。支援の輪に一人でも多くの方が加わってくださることを願っています」と話していました。



畑の草刈りを行なう参加者。